

和泉式部日記の和歌の各系統本の独自本文（一）

半 はん
沢 ざわ
幹 かん
一 いち

1

和泉式部日記の伝本は、三条西家本、寛元本、応永本、混成本の四系統に分けられ、そのうち三条西家本は発見がもつとも新しいが、最古・最善本とみなされている。現在の通称である「和泉式部日記」という作品名も、この三条西家本の表題による。他は「和泉式部物語」となっている。

このようにすでに定着した感のある諸本系統の四分類をふまえて作成された、岡田貴憲・松本裕喜『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成』（勉誠出版、二〇一七年）に、各系統の伝本として取り上げられているのは、以下のとおり、計一九本である（各名称および順番は同書に従う）。

- 三条西家本系統 一本…三条西家本
- 寛元本系統 二本…雅章筆本・黒川本
- 応永本系統 一〇本…京大本・図書寮本・島原本・榊原本・桑原本・大阪本・法大本・阿波国本・青山会本・寛文板本
- 混成本系統 六本…桂宮本・内閣本・滋大本・御所本・元禄板本・群書類従本

和泉式部日記の和歌の各系統本の独自本文（二）

三条西家本系統は一本のみ、寛元本系統も二本しかないのに対して、応永本は一〇本、混成本は六本と、伝本数が多い。これは、かつての流布のし具合を反映していると見られる。

2

和泉式部日記には、一四四首もの和歌が収められている（うち二首は宮と女の連歌）。歌日記とも言われる所以であり、ストーリー展開上も重要な役割を果たしている。

本稿は、和歌に限って、そのすべてを対象とし、系統による本文の異同の様相を明らかにする。その目的は、祖本の追求や系統の評価ではなく、各系統における和歌の文脈的な位置付けを検討することにある。

資料としては、先に挙げた『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成』を用い、異同の認定は、以下の四つの基準による。

- (1) 資料の示す本文に従い、系統による異同を重視する。ただし、応永本と混成本に関しては、一本のみの異同は取り上げない。
- (2) 一首における各句の単位で異同の有無を確認し、付属語一語のみでも異同の対象とする。
- (3) 本文のみを対象として、見せ消ちの有無を問わず、傍書は考慮しない。
- (4) 表記上の違い（字種、字体、仮名遣い、踊り字など）は問わない。

3

右の基準に従って確認した結果、異同がまったく認められない和歌は、一四四首中四〇首（二七・八％）であり、全体の四分の一強しかない。つまり、残りの四分の三弱の和歌には大なり小なりの異同が見られるということである。

異同の見られない和歌を登場順に、資料の歌番号で示す。参考までに、宮と女のどちらが詠み手かもそれぞれ示す。

一〔女〕・三〔宮〕・九〔宮〕／一五〔宮〕・一七〔女〕／二二〔宮〕・二三〔宮〕・二四〔女〕・二六〔宮〕・二七〔女〕・二八〔宮〕／
四三〔宮〕・四五〔宮〕・四六〔女〕・四七〔宮〕・四九〔女〕／五六〔宮〕／六三〔女〕・六四〔宮〕・六六〔女〕・六七〔女〕・六八〔女〕／
七一〔宮〕・七二〔宮〕・七四〔女〕／八〇〔宮〕・八八〔宮〕／九一〔宮〕・九二〔女〕・九五〔宮〕・九七〔宮〕／一〇〇〔女〕・一〇
一〔宮〕・一〇八〔女〕／一二一〔女〕・一二六〔女〕／一三〇〔宮〕・女・一三二〔女〕・一三六〔女〕／一四四〔宮〕

これから、次の三点が指摘できる。

第一に、諸本で異同のない和歌は作品全体に渡っていて、とくにどこかに集中しているわけではないという点である。前半（一〜七二）と後半（七三〜一四四）に分けると、前半が二四首、後半が一六首であり、やや前半に傾く程度である。ただし、便宜的に順に一〇首ずつに分けると（スラッシュで示す）、前半においては、二〇・四〇・六〇番台に五、六首あるのに対して、その間の三〇番台にはまったくなく、五〇番台にも一首しか見られないように、分布に波がある。

第二に、異同のない和歌が連続するのが九箇所あるという点である。四三番歌〜四七番歌の四首連続が最多、二六番歌〜二八番歌、六六番歌〜六八番歌の三首連続がそれに次ぎ、他は二首連続である。大雑把に見ると、二一番歌〜二八番歌、四三番歌〜四九番歌、六三番歌〜七四番歌における連続性が目に付く。

第三に、宮の和歌が二一首、女の和歌が一八首あり、ほぼ差がないという点である。全体として、宮の和歌が六八首、女の和歌が七五首で、割合としては、若干、宮のほうが多いが、それを勘案しても、大きく偏るというほどではない。

以上のことは、異同のある和歌の分布の裏返しである。つまり、異同のある和歌は、後半にやや多く、三〇番台や五〇番台の和歌はほとんどに異同があり、宮の和歌には四七首、女の和歌には五七首に異同が見られるということである。

4

以下では、異同のない四〇首を除いた一〇四首について見てみる。

この一〇四首の各和歌において、四系統本のうち何本に、一系統本のみの独自本文が認められるかを示すと、次のとおりである。なお、複数の系統本のそれぞれの独自本文は、同一句における場合もあれば、別句における場合もある。また、「〇本」というのは、二系統ずつにまたがった異同が見られるものである。

○本…一三首、一本…六一首、二本…二七首、三本…三首、四本…〇首

右に明らかなように、一系統本のみの独自本文が当該全歌数の六割近くに及ぶ。その内訳を示すと、

三条西家本…二〇首、寛元本…二四首、応永本…一六首、混成本…一首

寛元本がもっとも多く、全体の四割を占める。その分だけ、本文の独自性が顕著といえるが、混成本を除けば、三条西家本や応永本に比べ、突出しているとはではいえない。

一〇四首全体において、一首における重複も含め、それぞれの系統本の独自本文を含む和歌の全体数を示すと、次のとおりである。

三条西家本…四二首、寛元本…五〇首、応永本…二六首、混成本…七首

寛元本が最多であり、三条西家本が次ぐのは、一本のみの異同の場合と同様である。この結果から、四系統本のうち、寛元本と三条西家本は他の二系統本に比べると、それぞれに独自性が強いといえそうである。しかし、これに反するかのように、この二系統にのみ共通する、つまり元永本や混成本とは異なる本文の和歌もまた二三首ほどある。三条西家本と応永本のみ共通が三首、三条西家本と混成本のみに共通、寛元本と混成本のみに共通、応永本と混成本のみに共通がそれぞれ一首ずつであるのと比べれば、寛元本と三条西家本にのみ共通する本文もきわめて多い。

以上のうち、本稿では、一本のみの独自本文が見られる和歌六一首に限定して、各系統本の具体相を確認する。

まず、三条西家本系統のみの異同が見られる二〇首の本文は、次のようになってゐる。本文表記は資料に示された三条西家本に拠り、異同の個所を「」内に太字で示し、「／」の後に、他系統本を代表して、寛元本の本文を示す。

- (四) けふのまの心にかへておもひやれなかつ、のみすくす「心／月日」を
- (七) はかもなき夢をたにみてあかしてはなにをか「のち／夏」のよかたりにせん
- (一〇) 世のつねのこと、もさらにおもほえすはしめてものを思ふ「あしたは／身なれば」
- (二三) か、れともおほつかなくもおもほえすこれもむかしの「さき／えに」こそあるらめ
- (一四) ほと、きすよにかくれたるしのひねをいつかはきかんけふ「も／し」すきなは
- (二二) 「いかて／いかに」かはまきの「とくちを／板戸も」さしなからつらきこゝろのありなしをみん
- (五二) 人はいさわれはわすれす「ほと／日を」ふれと秋のゆふくれありしあふこと
- (六〇) あさましやのりの山ちにいりさして宮こ「のかたへ／へいさと」たれさそひけん
- (六五) 秋のうち「は／に」くちはてぬへしことはりのしくれにたれか袖「は／を」からまし
- (七七) 時雨にも露にも「あて、／あらて」ねたるよ「を／も」あやしくぬる、たまぐらのそて
- (九八) 神無月よにふりにたる時雨とやけふのなかめ「は／を」わかす「ふる／みる」らん
- (一〇三) うつろはぬときはの山も紅葉せはいさ「も／か」しゆきて「とふ／のと」くもみん
- (一〇七) ねぬる夜のねさめの夢にならひてそふしみのさとをけさはおき「ける／つる」
- (一一一) うたかはし「なを／また」うら見しと「おもふとも／おもへとも」こゝろにこゝろかなはさりけり

- (一二〇) 我ひとりおもふ「おもひは／はおもふ」かひもなしおなしこゝろに君もあらなん
 (一二三) たまのをのたえんものかはちきりをきし「なかに／なかき」こゝろはむすひこめてき
 (一二四) 神世よりふりはてにける雪なれ「は／と」けふはことにもめつらしきかな
 (一三三) うつゝともおもはさらなんぬるよのゆめに見えつるうきこと「そ、／、も」は
 (一四一) 冬の夜「の／は」恋しきことにめもあはてころもかたしきあけそしにける
 (一四二) 冬の夜「の／は」めさへこほりにとちられてあかしかたきをあかしつるかな

6

右の異同のありようを、次の七つの観点から整理してみる。

- (1) テキスト内での分布のしかた
- (2) 一首内で異同が見られる句の数
- (3) 異同箇所を含む句の位置
- (4) 句内での頭・中・末の位置
- (5) 異同の対象となる語の数
- (6) 異同の対象となる語の品詞構成
- (7) 異同相互の品詞・語数の一致率

これらの整理から、異同のありように関して、その異同の程度、言い換えれば、本文の独自性の程度とありようを探る。

たとえば、(1)については、特定箇所偏る、(2)については、句の数が多い、(3)と(4)については、どこかの句あるいは位置に集中する、(5)については、語数が多い、(6)については、多様な品詞（とくに自立語）がある、(7)については、一致率が低い、などの傾向を示す系

統本は、相対的に異同の程度が大きく、かつ本文の独自性が高いということが予想される。

これら七点において、三条西家本については、以下のことが指摘できよう。

まず、分布のしかたであるが、三〇番台から四〇番台の和歌が欠けているものの、ほぼテキスト全体に及んでいて、とくに偏りは見られない。

次に、一首における異同の句数である。二句にあるのが六首（二二・六五・七七・九八・一〇三・一一一）で、残り一四首が一句であり、異同句数は計二六句となる。

異同の句およびその句内での位置（句頭・句中・句末・句全体）は、次のとおり。

初 句… 四例（頭…一、中…〇、末… 三、全…〇）
第二句… 四例（頭…一、中…〇、末… 三、全…〇）
第三句… 四例（頭…一、中…〇、末… 二、全…一）
第四句… 五例（頭…一、中…二、末… 二、全…〇）
結 句… 九例（頭…二、中…五、末… 二、全…〇）
計 …二六例（頭…六、中…七、末…一二、全…一）

異同箇所はすべての句に分布しているが、結句のみが他句の倍くらいある。句内の位置としては、句末がもつとも多いものの、句ごとでは、結句の句中に用例がもつとも集中している。

次に、当該個所の三条西家本の独自本文の表現を、語数と品詞によって分けると、次のようになる（語順は問わない）。

〔一語〕名詞…三例、動詞…二例、副詞…三例／助動詞…一例、助詞…九例
〔二語〕名詞＋助詞…四例、動詞＋助詞…二例、助詞＋名詞…一例

計…五種一八例
計…三種 七例

〔三語〕名詞＋助詞2…一例

計…一種 一例

一語のみが全体の七割近くであり、しかも助詞にその半分が集中している。
これらに対応する個所の他系統本は次のとおり（三系統あるいは二系統に共通の本文を示す）。

〔一語〕名詞…二例、動詞…二例、副詞…三例、形容詞…一例／助詞…九例、助動詞…一例

計…六種 一八例

〔二語〕名詞＋助詞…二例、動詞＋助詞…三例／助詞2…一例

計…三種 六例

〔三語〕名詞＋助動詞＋助詞…一例、感動詞＋助詞2…一例

計…二種 二例

三条西家本同様、一語のみで助詞が格段に多い。

このうち、同一品詞同士になるのは次のとおり、二六例中の一九例がそれに当たる。

〔一語〕名詞…二例、副詞…三例、動詞…一例／助動詞…一例、助詞…九例

計…五種 一六例

〔二語〕動詞＋助詞…二例、名詞＋助詞…一例

計…二種 三例

一語の同一品詞同士が計一六例あり、異同のほとんどを占める。中では、助詞同士という小さい異同が目立つ。
同一品詞同士の具体例を挙げる（各末尾のカッコ内は歌番号）。

〔名詞〕心／月日（四）、のち／夏（七）、さき／えに〈縁〉（一二三）

〔動詞〕ふる〈降〉／みる（九八）

〔副詞〕いかて〔＝で〕／いかに（二二二）、なを／また（一一一）

〔助動詞〕ける／つる（一〇七）

〔助詞〕は／を（六五・九八）・に（六五）・と（一二四）、も／か（一〇三）・し（二四）、の／は（二四一・一四二）、を／も（七七）

〔動詞＋助詞〕あて＋、「＝で」／あら＋て「＝で」（七七）、おもふ＋とも／おもへ＋と「＝ど」も（一一一）

〔名詞＋助詞〕とくち〈戸口〉＋を／板戸＋も（一二二）

助詞の「は／を」や「の／は」が各二例見られる以外は、一例ずつである。

相異なる例は次のとおりで、すべて単独例であり、一二〇番歌を除けば、意味的な隔たりが大きい。

〔動詞／名詞〕とふ〈問〉／のと「＝ど」〈和〉（一〇三）

〔名詞／名詞＋助詞〕ほと「＝ど」〈程〉／日＋を（五二）

〔名詞＋助詞／形容詞〕なか〈中〉＋に／なか「＝が」き〈長〉（一二三）

〔名詞＋助詞／名詞＋助動詞＋助詞〕あした＋は／身＋なれ＋は「＝ば」（一〇）

〔名詞＋助詞／助詞＋動詞〕おもひ＋は／は＋おもふ（一二〇）

〔助詞＋名詞／助詞＋助詞〕そ「＝ぞ」＋、「＝其」／、「＝と」＋も（一三三）

〔助詞＋名詞＋助詞／助詞＋感動詞＋助詞〕の＋かた＋へ／へ＋いさ「＝ざ」＋と（六〇）

7

次は、寛元本系統である。当該本のみ異なる二四首の本文は、次のようになっている。本文表記は原則として二本のうちの黒川本により、他系統本としては三条西家本の本文を示す。なお、「・」は該当個所が欠字・欠文であることを示す。

- (三〇) いまはよもきしも「をかしと／せしかし」おほみつのふかきこゝろはかはと「みしかと／みせつゝ、」
- (三一) あさつゆのおくる思ひにくらふれはたゝに「かへさ／かへら」んよひはまされり
- (四一) 月をみてあれたるやとに「なかむれは／なかむとは」「みにしら／見にこ」ぬまでもたれにつけよと
- (四二) 心みにあめもふらなんやとすきてそらく月のかけ「とまるへく／やとまると」
- (四四) 我ゆへに月をなかむとつけ「たれ／つれ」はまことかと「みよ／見に」いてゝきにけり（雅章筆本のみ）
- (五〇) おき風「の／は」ふかはいもねていまよりそおとろかす「めを／かと」きくへかりける
- (五一) くれ／とあきの日ころ「を／の」ふるまゝに思ひしらぬあやしかりしも
- (五九) 心みにをのかこゝろもこゝろ見んいさ「や／・」みやこへと「・／き」てさそひ見よ
- (六九) 秋のうちはくちける物を人もさはわかそて「のみと／とのみ」思ひけるかな
- (八四) まとろまでひと「に／夜」なかめし月みるとおきながらしもあかしかななる（黒川本のみ）
- (八五) もののうへにあさ日さすめりいまは、やうちとけ「わたる／にたる」けしきみせなん（黒川本のみ）
- (八七) 君はこすたまゝみゆるわらはをはいけともいまはいはしと「ぞ思ふ／おもふか」
- (九六) わか「そてに／うへは」ちとりもつけしおほとりのはねにも「さるは／・・」しもは「・・・／さやは」おき「けり／ける」
- (一〇四) たかせふねはや「さし／こき」いてよさはる事さしかへりにしあしまわけたり
- (一〇九) いまのまに君「もきませよ／きまさなん」こひしとてなもある物を「わか／われ」ゆかんやは
- (一一六) 思ふことなくて「くらして／過にし」おとゝひと昨日とけふになるよしもかな
- (一二七) なくさむる君も「さり／あり」とは思へとも猶夕くれはものそかなしき（雅章筆本のみ）
- (一二九) おきながらあかせるものあした「より／こそ」まされる物はよになかりけり
- (一二二) たえし「時／ころ」たえねと思ひしたまのを、君によりまたおしまるゝかな
- (一二七) わかやとにたつねてきませふみつくるみち「を／も」、しへんあひもみるへく
- (一二八) さゆるよのかすかくしき「も／は」われなれやくあさしもをおき「ゐ／て」みつらん

(一二九) 雨もふりゆき「と／も」ふる「なる／める」このころをあさしものとみおきゐてはみる
 (一三二) しかはかりちきりし物をさためなきさはよのつねにおもひ「なさは／なせと」や
 (一三九) 雪ふれはき、のこのはも春ならて「をしへん／をしなへ」むめの花そさきける

8

右の異同のありようを、三条西家本と同様に整理する。

分布のしかたについては、三条西家本と比べると、二〇番台までと七〇番台に異同が見られない点が目を引く。

一首あたりの異同句数は、三条西家本では二句までしかなかったのに対して、寛元本では三句が一首(九六)あり、二句も七首(三〇・四一・四四・五〇・一〇九・一二八・一二九)もある。残り一六首が一句であり、計三三句が独自本文となる(欠文の五九番・九六番の各一例は除く)。

異同のある句およびその位置は、次のとおり。

初 句… 三例(頭…〇、中… 〇、末… 三、全…〇)
 第二句…一〇例(頭…〇、中… 四、末… 六、全…〇)
 第三句… 三例(頭…〇、中… 一、末… 一、全…一)
 第四句… 八例(頭…〇、中… 三、末… 五、全…〇)
 結 句… 九例(頭…二、中… 三、末… 四、全…〇)
 計 …三三例(頭…二、中…一一、末…一九、全…一)

すべての句に異同が見られるが、初句と第三句が少ない点が、三条西家本とは異なる。句内の位置については、句末に半分以上と集

中するのは三条西家本と共通するが、どの句にあつても、句末が最多である点は、三条西家本と異なる。異同個所の表現を語数と品詞によつて分けると、次のようになる。

〔一語〕 動詞…六例、名詞…一例、連体詞…一例／助動詞…三例、助詞…八例	計…五種 一九例
〔二語〕 動詞＋助詞…六例、動詞＋助動詞…二例、名詞＋助詞…二例、形容詞＋助詞…一例／助詞 2…一例	計…五種 一二例
〔三語〕 動詞＋助動詞＋助詞…一例、名詞＋助動詞＋助詞…一例	計…二種 二例

三条西家本と比べて、二語以上のほうの種類と用例が多い点が注目される。

これに対する他系統本は次のとおりである（欠文の五九番歌と九六番歌の各一例は除く）。寛元本以上に、二語以上のバラエティがある。

〔一語〕 動詞…四例、名詞…三例／助動詞…四例、助詞…七例	計…四種 一八例
〔二語〕 動詞＋助詞…六例、名詞＋助詞…一例／助詞 2…二例、助動詞 2…一例	計…四種 一〇例
〔三語〕 動詞＋助詞 2…二例、動詞＋助動詞 2…一例、動詞 2＋助詞…一例、動詞＋助動詞＋助詞…一例	計…四種 五例

このうち、同一語数・品詞同士の異同は次のとおり、一八例ある。

〔一語〕 動詞…三例、名詞…一例／助動詞…三例、助詞…六例	計…四種 一三例
〔二語〕 名詞＋助詞…一例、動詞＋助詞…一例／助詞＋助詞…一例	計…三種 三例

一語の同一品詞同士が計一六例と、全体の四割近くで、三条西家本の場合よりかなり低い。さらに、二語以上では同一ケースはきわ

めて少ない。

同一品詞同士の具体例を挙げる。どれも一例ずつである。このうち、三三番歌は他動詞と自動詞、九六番歌は活用形の違い、一三三番歌は接続助詞の違い、六九番歌は逆順という、意味的にも近い関係にある。

〔動詞〕かへさ〈帰〉／かへら〈帰〉(三三)、さし〈差〉／こき〔Ⅱぎ〕〈漕〉(一〇四)、さり〈然有〉／あり〈有〉(一一七)
〔名詞〕時／ころ〈頃〉(二二二)

〔助動詞〕けり／ける(九六)、たれ／つれ(四四)、なる／める(二二九)

〔助詞〕の／は(五〇)、を／の(五一)・も(二二七)、も／は(二二八)、と／も(二二九)、より／こそ(二一九)

〔名詞＋助詞〕そて〔Ⅱで〕〈袖〉＋に／うへ〈上〉＋は(九六)

〔動詞＋助詞〕なさ〈成〉＋は〔Ⅱば〕／なせ〈成〉＋と〔Ⅱど〕(二二二)

〔助詞＋助詞〕のみ＋と／と＋のみ(六九)

相異なる例は次のとおり。三〇・四一・四二・四四・八七・一〇九・一三九のように、自立語自体は共通するケースが半分近くある。

〔動詞／助詞〕ゐ／て(二二八)

〔助詞／名詞〕に／夜(八四)

〔動詞／動詞＋助詞〕みよ〈見〉／見＋に(四四)

〔動詞／助動詞＋助動詞〕わたる／に＋たる(八五)

〔名詞＋助詞／名詞〕わ＋か〔Ⅱが〕／われ(一〇九)

〔名詞＋助詞／助詞＋助詞〕め〈目〉＋を／か＋と(五〇)

〔動詞＋助詞／動詞＋助詞＋助詞〕なか〔Ⅱが〕むれ＋は〔Ⅱば〕／なか〔Ⅱが〕む＋と＋は(四一)

- 〔動詞＋助詞／動詞＋助動詞＋助動詞〕くらし〔暮〕＋て／過〔すぎ〕＋に＋し（一一六）
- 〔動詞＋助動詞／助詞＋動詞＋助詞〕とまる＋へ〔＝べ〕く／や＋とまる＋と（四二）
- 〔助詞＋動詞／動詞＋助詞〕そ〔＝ぞ〕＋思ふ／おもふ＋か（八七）
- 〔助詞＋動詞／動詞＋助詞〕…も＋きませよ／きまさ＋なん（二〇九）
- 〔形容詞＋助詞／動詞＋助動詞＋助詞〕をかし＋と／せ＋し〔＝じ〕＋かし（三〇）
- 〔動詞＋助動詞＋助詞／動詞＋助詞〕み〔見〕＋しか＋と〔＝ど〕／みせ〔見〕＋つ、（三〇）
- 〔名詞＋助詞＋動詞／動詞＋助詞＋動詞〕み〔身〕＋に＋しら〔知〕／見＋に＋こ〔来〕（四二）
- 〔動詞＋助動詞／副詞〕をしへ〔教〕＋ん／をしなへ〔＝べ〕（一三九）

9

応永本系統のみの異同が見られる一六首の本文は、次のようになっている。本文表記は応永本系統の中原則的には榊原本により、他系統本としては三条西家本の本文を示す。

- （八）夜とと、にぬるとはそてをおもふ〔に／身〕ものとかにゆめをみるよひそなき
- （一一）またましもかはかり〔ころ／こそ〕はあらましか思ひもかけぬけふの夕暮（島原本と榊原本）
- （一八）おりすきはさても〔ころ／こそ〕やめさみたれのこよひあやめのねをやひかまし（島原本と榊原本）
- （三二）夜ひことにかへしはすれといかてなをあかつき〔・・は／おきを〕君に〔を／せ〕させし（島原本と榊原本）
- （三七）まつ〔や／・〕山に波たかしとはみてしかとけふのなかめはた、ならぬかな（島原本と榊原本）
- （三八）きみをこそすゑのまつとはおもひつれひとしなみにはたれ〔は／か〕こゆへき（島原本と榊原本）
- （四八）なかむらんそらをたにみすたなはたに〔いまた／いまる〕許の我身とおもへは（島原本と榊原本）

- (五三) 「をき／せき」こえてけふそとふとや人はしる思もひたえぬ心つかひを（大阪本、法大本、青山会本、寛文板本）
- (五四) あふみちはわすれぬめりと見しほとに「をき／せき」うちこえてとふ人やたれ
- (五八) せきやまの「せきとめら／せきとめられ」ぬなみたこそあふみの海「に／と」「かれはつ／なかれいつ」らめ
- (六二) 「なかめ／なけき」つ、秋のみ空をなかわれは雲うちさはき風「は／そ」はけしき（桑原本）
- (七五) きみをきていつちゆくらんわれたにもうきよの中に「しのひ／しる」てこそふれ（島原本と榊原本）
- (八六) 朝日「さす／影」「今は／さして」きゆへき霜なれとうちとけかたき空のけ色「に／そ」（圖書寮本と寛文板本）
- (一一二) うらむらんこゝろは「たゆれ・たゆむ／たゆな」かきりなくたのむ君をそ我もうたかふ（島原本と榊原本・大阪本）
- (一二三) しもかれはわひし「よりけり／かりけり」秋かせのふくには萩のおとつれもしき
- (一四三) くれ竹のよ、のふること「おもほえん・おもほらん／おもほゆる」むかしかたりは「君／われ」のみやせん（青山会本と寛元板本）

和歌末尾に付記したように、応永系統の一〇本のうち、島原本と榊原本の二本のみに共通する独自本文が目立つ。また、一一二番歌や一四三番歌のように、同一個所で、同じ系統に二首の異同が見られる場合もある。

10

異同歌の分布としては、前半は二〇番台・九〇番台から一〇〇番台、後半は一二〇番台から一三〇番台を欠き、前半に用例が傾く。一首あたりの異同句数は、三句が二首（五八・八六）、二句が二首（三一・一四三）、一句が一二首であり、計三句の異同は、三条西家本や寛元本よりは少ない。

異同のある句およびその位置は、次頁のとおり。

初句… 四例（頭…二、中…一、末…一、全…〇）
 第二句… 六例（頭…二、中…一、末…三、全…〇）
 第三句… 三例（頭…〇、中…〇、末…二、全…一）
 第四句… 四例（頭…二、中…一、末…一、全…〇）
 結句… 六例（頭…三、中…二、末…一、全…〇）
 計 …二三例（頭…九、中…五、末…八、全…一）

すべての句にはほぼ満遍なく分布し、とくに偏りがない。句内の位置としては、全体を除けば、句中が目立って少ない。異同個所の表現を語数と品詞によって分けると、次のようになる（欠字の三一番歌の一例は除く）。三語は見当たらず、一語のみが多く、各品詞にばらつく。

〔一語〕 名詞…六例、動詞…五例、副詞…一例／助詞…七例
 〔二語〕 動詞＋助動詞…二例、名詞＋助詞…一例

計四種 一九例
 計二種 三例

これに対する他系統本は次のとおり（欠字の三七番歌の一例は除く）。応永本と大差ない。

〔一語〕 動詞…六例、名詞…五例／助詞…六例
 〔二語〕 動詞＋助詞…二例、動詞＋助動詞…一例、名詞＋助詞…一例、形容詞語尾＋助動詞…一例

計三種 一七例
 計四種 五例

このうち、同一語数・品詞同士の異同は次のとおり、全体の約半分の一〇例ある。

〔一語〕助詞…四例、動詞…三例、名詞…三例

計三種九例

〔二語〕動詞＋助動詞…一例

計一種一例

同一品詞同士の具体例を挙げる。

〔助詞〕は／か（三八）、に／と（五八）、は／そ〔Ⅱぞ〕（六二）、に／そ〔Ⅱぞ〕（八六）

〔動詞〕かれはつ〔枯果〕／なか〔Ⅱが〕れいつ〔Ⅱづ〕〔流出〕（五八）、なか〔Ⅱが〕め〔眺〕／なけ〔Ⅱげ〕き〔嘆〕（六二）、しの

ひ〔Ⅱび〕〔忍〕／しる〔強〕（七五）

〔名詞〕をき〔沖〕／せき〔関〕（五三・五四）、君／われ〔我〕（二四三）

〔動詞＋助動詞〕せきとめ＋ら〔塞止〕／せきとめ＋られ（五八）

この中で注目されるのは、五三番と五四番の贈答歌において、ともに他本の「をき」を「せき」としている点と、一四三番歌では他本の「われ」を「君」と立場を反対にしている点である。なお、五八番歌の「せきとめら」は末尾の「れ」が抜けたのかもしれない。相異なる例は次のとおりである。一二三番歌と一四三番歌以外の、意味の隔たりが大きい。

〔名詞／助詞〕ころ／こそ（一一・一八）

〔助詞／名詞〕に／身（八）

〔助詞／動詞〕を／せ〔サ変〕（三二）

〔動詞／名詞〕さす〔射〕／影（八六）

〔副詞／動詞〕いまた〔Ⅱだ〕／いまる（四八）

〔動詞／動詞＋助詞〕たゆれ〔絶〕・たゆむ〔弛〕／たゆ〔絶〕＋な（一一二）

〔名詞＋助詞／動詞＋助詞〕いまは／さし＋て（八六）

〔動詞＋助動詞／動詞〕おもほえ＋ん・おもほ＋らん／おもほゆる（二四三）

〔動詞＋助動詞／形容詞活用語尾＋助動詞〕より＋けり／かり＋けり（二二三）

11

最後に、混成本系統のみに独自本文がある一首は、次のとおりである。本文表記は応永本系統の中の群書類従本により、他系統本としては三条西家本の本文を示す。

（七〇）消ぬへき露のいのおもはすはひさしききくにか、りやはせ〔む／ぬ〕

一首だけなので、この異同について触れておく。

七〇番歌は宮から女への返歌五首のうちの第二首である。係助詞「や」との呼応から、混成本では意志・推量の助動詞「む」の連体形、それ以外では打消しの助動詞「ず」の連体形「ぬ」となっていて、肯定と否定の正反對の意味を表わす。

上句の意は、女に対する「すぐ消えてしまう露のような命と思わないで」であるから、以下には、別様に思うことが予想される。その思いとは、「ひさしききく（久しき菊）」とあるところから、それにあやかって長生きすることを思うことであろう。とすれば、混成本の「かかりやはせむ」では、菊に頼ろうとするのかの意となり、女のような意志に対する疑問であって、辻褄が合わない。いっぽう、他の系統本すべての「かかりやはせぬ」なら、（どうして）菊（＝宮）に頼らないのかの意となつて、整合する。つまり、混成本の本文では文脈的に不適切ということであり、おそらくは不作為に生じた独自本文であろう。

これまで整理してきた結果を、系統別の本文の独自性の如何を比較するために、改めてまとめて示し、簡単にコメントする。
まずは異同歌の分布であるが、登場順に並べると、次のとおり（Aは三条西家本、Bは寛元本、Cは応永本、Dは混成本を示す）。

四A・七A・八C・一〇A・一一C・一三A・一四A・一八C・二二A・三〇B・三二C・三二B・三七C・三八C・四一B・四
二B・四四B・四八C・五〇B・五一B・五二A・五三C・五四C・五八C・五九B・六〇A・六二C・七五C・六五A・六九
B・七〇D・七七A・八四B・八五B・八六C・八七B・九六B・九八A・一〇三A・一〇四B・一〇七A・一〇九B・一一一
A・一一二C・一一三C・一一六B・一一七B・一一九B・一二〇A・一二二B・一二三A・一二四A・一二七B・一二八B・一
二九B・一三二B・一三三A・一三九B・一四一A・一四二A・一四三C

傍線は同一系統本の独自本文歌が三首以上、連続するところであるが、Bの寛元本に三個所、Cの応永本に一個所あるが、Aの三条西家本は二首どまりである。この点から、寛元本は他系統本に比べ、独自本文による文脈上の関連性が強いと見られる。
和歌ごとの異同の見られる句数については、次のとおりである。

	三 条	寛 元	応 永	混 成	合 計
一 句	14	16	12	1	43
二 句	6	7	3	0	16
三 句	0	1	2	0	3

どの系統本においても、一句のみ異同が大勢を占めるが、寛元本は二句以上の割合がもっとも高く、三条西家本が次ぎ、これらの本文の独自性が目立つ。

次に、異同のある句の分布を示すと、次のとおりである。

合 計	混 成	応 永	寛 元	三 条	
11	0	4	3	4	初 句
20	0	6	10	4	二 句
10	0	3	3	4	三 句
17	0	4	8	5	四 句
25	1	6	9	9	結 句
83	1	23	33	26	計

混成本以外は、全句に及んでいるが、三条西家本は、結句の集中度が相対的に高く、寛元本は、第二句・第四句・結句という長句に偏る。

句内の異同の位置については、次の表のとおり。

合 計	混 成	応 永	寛 元	三 条	
17	0	9	2	6	句 頭
23	0	5	11	7	句 中
40	1	8	19	12	句 末
3	0	1	1	1	句 全

全体としては、句末がもつとも多く、以下、句中、句頭、句全体の順であり、三条西家本はその全体的な傾向とほぼ重なる。それに對して、寛元本は句中と句末の集中度が高く、応永本は句頭の用例数がもつとも多く、それぞれの独自性が認められる。各系統本の独自本文個所における語数の分布は、次のとおりである。

	三 条	寛 元	応 永	混 成	合 計
1語	18	19	19	1	57
2語	7	12	3	0	22
3語	1	2	0	0	3

全体としては、約七割が一語のみの異同であり、三条西家本はそれと同じであるのに対して、応永本は一語のみが平均より高く、寛元本は平均よりかなり低く、二語・三語という多めの異同が多く、独自性が認められる。

なお、一語のみの場合を、自立語と付属語に分けると、全体では両方とも二八例で同じであるが、応永本は自立語が一二例、付属語が六例で、唯一自立語が優勢である点、一語ではあるものの、独自性があるといえる。

次に、他の系統本と同一品詞・同一語数の各系統本の分布を示すと、次のとおりである。

	三 条	寛 元	応 永	混 成	合 計
一 致	19 (73)	18 (55)	11 (45)	1	49 (59)
一 語	16 [84]	16 [89]	9 [90]	1	42 [88]
全 体	26	33	22	1	82

全体の平均一致率は約六割であるのに対して、三条西家本はそれを上回り、寛元本と応永本はそれを下回る。一致率が高いということは、それだけ異同差が小さく、独自性も低いということになる。その点から言えば、とくに応永本は独自性が高い。品詞・語数の一致する中で、一語のみの場合の割合を見ると、どの系統本も九割前後であるから、語数によってこの結果が左右されるわけではなさそうである。

13

以上まとめてきた各系統本の独自本文の特徴の度合いを示せば、次頁の表のようになる。なお、混成本は独自本文が一首に一例しか見られず、しかも、すでに見たように、本文としても適切とは言いがたいものであったので、除外する。○は独自性が顕著、△は独自性が希薄の傾向にあること、無表示は中間的であることを示す。

	三 条	寛 元	応 永
歌 数		○	△
分 布	△	○	
句 数		○	△
句の位置	○	○	△
句内位置	△	○	○
語 数		○	△
一 致	△		○

右の表を見る限り、寛元本は一致率以外のすべての項目で顕著な傾向を示していることになり、他の系統本に比して、本文の独自性が際立っている。

それに対して、三条西家本は顕著な項目が一つのみ、稀薄な項目が三つ、応永本は顕著な項目が二つ、稀薄な項目が四つあり、ともに稀薄性のほうが優勢である。

ただし、応永本は他系統本との一致率がもっとも低いという点において、他の項目よりも重きを置く必要があるだろう。三条西家本については、無表示の中間的な傾向を示すのが三つもあって、応永本に比べても、独自性が低いといえる。

これは和歌本文の、一首における唯一の独自本文に限っての結果であるから、それをそのまま作品全体の本文に及ぼすことはもとよりできない。また、今回は数量的な比較のみであって、異同の質についてはほとんど触れていないので、本文としての文脈的な妥当性にまで及んでいない。さらに、四系統に分類すること自体に関しても、先行研究を無条件の前提としたからであって、新たな書誌学的あるいは文献学的な検討をふまえたものでもない。

右の指摘はその上でのことである。ただし、この作品の成立過程において、女と宮との贈答歌を手掛かりとして物語を編んだとするならば、和歌に見られる異同は、物語の展開を左右するのであり、地の文における異同はその影響を受けたものと考えられる。つまり、和歌本文の独自性の如何は、そのような作品全体の本文のありようの違いをもたらすということである。

このように考えるとき、寛元本における独自本文の特徴の顕著性と、三条西家本における独自本文の特徴の稀薄性が物語るのは、いったい何であろうか。

それゆえに、平均的な三条西家本が原本に近いのであり、それから、寛元本のような独自性の強い本文が派生していったのかもしれない。

ないし、あるいはその逆かもしれない。このことは、和歌における異同による作品全体の文脈的な整合性や妥当性の如何を、どのように評価するかという問題とも結び付くであろう。まさに異同の質が問われるということである。